

ミニ

特
集

イネカメムシの発生と防除の現状

愛知県におけるイネカメムシの薬剤抵抗性と
その対策

—ミナミアオカメムシとの比較から—

愛知県農業総合試験場 いし石 かわ川 ひろ博 し司

はじめに

斑点米カメムシの一種であるイネカメムシは、成虫の体長が12~13 mmの茶褐色のカメムシで、イネの籾の基部を加害することにより、基部斑点米を生じさせる(図-1)。また、ほかの斑点米カメムシ類と異なり、出穂期から登熟初期に籾を加害し、不稔を引き起こし、収量を減少させる(図-2; 稲生・高井, 1975)。かつて斑点米カメムシの主要種であったが、1960年台以降発生量が減少した。しかし、2010年以降、各地で次々と発生被害が報告されている(竹内・渡邊, 2024)。愛知県でも本種の発生が2015年以降に増加傾向となり、特に2021年以降は急増し、従来の優占種であったミナミアオカメムシ、アカスジカスミカメやクモヘリカメムシを上回る発生が認められている(図-3)。

そのような中、2023年に愛知県尾張地域A市で本種が多発し甚大な減収被害が発生し、作況指数は94で不良であった(東海農政局, 2023)。成虫を採取し、薬剤の感受性検定を行った結果、地域で長年使用されてきたエチプロール水和剤の感受性が著しく低下しており(図-4)、主要薬剤の抵抗性が多発要因として考えられた。本



図-1 イネカメムシの成幼虫

来、イネカメムシは年1世代または2世代で、薬剤抵抗性リスクの低い害虫に分類されているが(農林害虫防除研究会, 2021)、なぜエチプロール水和剤の薬剤感受性が低下したのか? ここでは、イネカメムシの薬剤抵抗性の要因について、愛知県で主要な斑点米カメムシの一種であるミナミアオカメムシとの発生生態と防除対策の違いから考察し、薬剤抵抗性リスクと今後の対策について紹介する。

I イネカメムシとミナミアオカメムシの
発生生態の違い

ミナミアオカメムシ(図-5, 以下, ミナミアオ)は、成虫の体長が12~16 mmの大型のカメムシで、亜熱帯から温帯に生息する世界的にも有名な害虫である。ミナミアオは本来、南方系の昆虫であるが、愛知県では2008年に初めて県南東部で生息が確認され(愛知県, 2008)、翌年には県内各地に急速に分布域が拡大した。

ミナミアオは多食性で加害植物は野菜・果樹・作物など32科145種以上が記録されている(桐谷・法橋, 1970)。愛知県では主にコムギ、イネ、ダイズ圃場で年3世代発生する(図-6)。また、成幼虫は春先から初冬までは田畦畔や休耕地で生息し、春はセイヨウカラシナ



図-2 イネカメムシによる加害時期と被害

Insecticide Resistance in Rice Stink Bugs (*Niphe elongata* (Dallas)) in Aichi Prefecture and Strategies for Its Management: A Comparative Analysis with the Southern Green Stink Bug (*Nezara viridula*). By Hiroshi ISHIKAWA

(キーワード: イネカメムシ, ミナミアオカメムシ, 薬剤抵抗性)